

4

## 被災地の人たちと共に励まし合える関係を築くための教材づくり

右 谷 浩 (立命館慶祥中学校・高等学校)

### 1. 研究のきっかけ

東日本大震災復興支援について、本校での取り組みは、現在各教科、校務分掌（「みつめる つながる つたえる + R FOR FUTURE」企画での『読売新聞社北海道支社協力「私の風景」表彰式』『朝日新聞社主催「東日本大震災 報道写真展』『倉本聡講演会』や、保護者会が主催した有識者によるパネルディスカッション「いま、私たちにできること」）などばらばらに行われており、有機的につながっていないという実情がある。そこで、東日本大震災被災1周年にあたって、道徳「立命科」の授業で、東日本大震災から学び、被災地との交流を企画する。現在、立命館大学の附属校5校では、担当者が教育研究・研修センターとともに、月1回集まり、道徳「立命科」についての実践交流を行っている。このメンバーにも意見をいただきながら、東日本大震災についての新たな学びと交流の場としたい。また、取材や交流を深める中で、教材化をはかる。大切なことは、現地に教職員・生徒が出かけ、自分の目で現地を取材し、被災地の人たちと直接交流をすすめることである。立命館大学の附属校5校では、2011年12月26日から28日、被災地石巻市を訪問した。「被災地の人たちの現状を知り、被災地の人たちから学び、学んだ成果を被災地の人たちに返し、被災地の人たちと共に励まし合える関係を築くための教材作り」～東日本大震災復興にかかわる附属校の取り組みを教材化につなげる企画～を立て、具体的な取り組みの内容としては、

- (1) 東日本大震災および福島第一原発事故を教訓に、小学校を含む各附属校が取り組んできた教育実践例や授業実践例を「実践報告集」としてまとめる。
- (2) 立命館小学校が現在まで取り組んできた交流地、石巻市教育委員会の協力を得て、現地小中高および地域の方々へのインタビューを基に、現地の状況を伝えるのみならず、被災者の当時の言動の中から教材化（DVD）を図っていく。そのために、各校教員代表でチームを編成し、現地を訪問することとする。

を挙げた。

### 2. 防災教育の新たな視点

「被災地の人たちと共に励まし合える関係を築くための教材づくり」については、3.11東日本大震災体験から学んだ教訓を生かすことと被災地の人たちの思いの共有化を柱に、副読本の作成とカリ

キュラムの開発をすることである。そのねらいは、災害による被害を最小化する試みであり、災害の予防と日常的な予防措置や災害時の被害の抑制と応急的な対応、災害復旧と復興の過程等を通じて、「命の大切さ」を育むことを目的とする。

### ○防災教育のねらい

- ① 困難な状況に出会ったとき、自ら判断し主体的に行動できる子ども
- ② 自他の命や人権を尊重できる子ども
- ③ 相手の思いに寄り添い、共感的に受け止めるやさしさをもつ子ども
- ④ 自然を正しく理解し、そのすばらしさに気づくとともに畏敬の念を持つ子ども
- ⑤ 社会の一員として自覚を持ち、社会に対して積極的に関わろうとする子ども
- ⑥ 自らのかけがえのない命を自分で守ることのできる子ども

### ○防災教育のカリキュラム

- ① 人間としてのあり方、生き方
- ② 防災上必要な知識を身につける
- ③ 防災上必要な技能を身につける

学習の具体的な中身は、生命の大切さ、人とのつながり、自然に関する知識、社会に関する知識、日頃の備え、被害の最小化等である。

## 3. 被災地石巻訪問と相川小学校との交流

### (第1回防災教育研究会)

平成24年度4月30日(月)～5月3日(木)被災地・宮城県石巻市を教員2名が訪問し、石巻市教育委員会生涯学習課・石巻日日新聞社・相川公民館・相川小学校において、取材活動や交流活動をおこなった。活動は、録画し、記録した。具体的には「石巻市を中心とした東北各地の震災と復興の状況を視察・調査」「被災し、間借りをしている石巻市立相川小学校の相川白波太鼓を学び、伝承を受ける」「相川小学校の児童との交流」の3点である。



日和山より石巻市を遠望



被災した門脇小学校



石巻日日新聞社にて



相川小学校にて「相川白波太鼓」

第1回防災教育研究会では、相川小学校の先生方から、地震発生時、そしてその後の避難、避難生活、学校の再開、児童のケアなど多岐にわたって伺い、多くの教訓を得た。

#### <第1回防災教育研究会での話と教訓>

担任の指示で、机下に一時避難した。電気系統がまったくだめになり、使用不可になった。そこで、校庭への二次避難を知らせるために、各クラスに口頭で指示した。小学1, 2年生は、下校時間であったため、人員把握が困難で混乱し、通信が断絶したため、カーラジオやワンセグから、外部情報を収集した。その間も、迎えに来た保護者への児童引渡しは、行っていた。3月9日にも地震があり、かえって油断をしていた。チリ地震のときも、津波は、校舎1階部分であったので、山の祠まで逃げる三次避難までで十分だと判断されていた。ここまでが通常の訓練時の避難場所であった。しかし、津波の前に地鳴りを感じ、川が逆流して、堤防が決壊したのを見て、四次避難の山上にあがることを指示した。道なき道をひたすら山頂を目指した。海から200メートルに位置していたため、結果的に、校舎の3階以上までが浸水した。幸い山頂には、子育て支援センターがあり、そこに避難することができ、食料等も確保できた。電気がない、親に会っていないことを不安がる子供たちを三日間励まし、教員全員が、退勤し、家庭に戻ったのは、3日後だった。その後、教員は、支援物資やボランティア対応に追われた。地域から学校がなくなるのではないかとという地域住民の不安の中、橋浦小学校に間借りして、学校を再会したのは、4月21日であった。朝夕二便のバスに、教員が同乗し、児童を移送している。震災後の児童の心のケアとして、「スクールカウンセラーによる相談会」「三校合同運動会」などを開催してきた。鼓笛隊や白波太鼓など子供たちが、再建を目標にしたことに、社会が支援し、寄贈してくれるなど大きな支えとなった。2学期になって、落ち着いてくると、保健室通いが増え、スクールカウンセラーに二日連続で、来ていただくなど対応した。心のケアについては、子どもへの影響が大きい保護者のケアも、課題になっている。授業で、子どもたちを支え、励まし、変えていく。防災教育の課題も、見えてきた。

【教訓1】体育館や運動場が安全とは限らない。耐震性が問われているので、校舎内が安全な場合もある。地震よりも、津波が怖い。津波は、重たい。

【教訓2】豆電球の光りは、ペットボトルに入れると、明るい灯りになる。カーラジオやワンセグは、外部情報を得るために、重宝する。

【教訓3】ライフラインがストップすることは、訓練では気づかない。場面によっては、児童・生徒の把握も困難であるが、スピードの方が大事である。訓練のマニュアルは、避難の中で、生きる。最悪の状況を日頃からつかみ、地域を巻き込んだ訓練が必要である。

【教訓4】保護者への児童引渡しが、最大の反省事である。保護者への引渡しは、見直すべきである。保護者と、帰宅中、帰宅後、津波に襲われ、死亡した児童が、圧倒的に多かった。児童の安全を最優先で考えると、学校の安全性は、きわめて高い。

【教訓5】緊急時の意思決定は、校長もしくは、教頭。訓練時の避難手順やマニュアルを優先し、日頃から準備しておく。いかなる災害であっても、想定内にする努力を怠らない。名簿は、避難する児童・生徒を把握するために必要なもので、すぐに持ち出せるようにする。

【教訓6】大災害では、つねに時間の勝負。あらかじめ逃げるコースと場所を決めておいて、訓練を

し、迷わず行動を取ることが大切である。

#### 4. 石巻市の児童・生徒が作成した「石巻こども新聞」の教材化

中2道徳「立命科」では、1週目、取材した教訓を学んだ。2週目、編集したDVDを視聴させ、相川小学校との交流の提案をした。相川小学校が、平成25年3月閉校となるため、相川小学校が伝承してきた相川白波太鼓に取り組むことなど、交流についての意見が集まった。さらに、中2社会科では、石巻日日新聞社発行の「石巻日日こども新聞」を教材として、「石巻のいま」を同世代の視点から発信する新聞を通じて現実を知り、震災と真正面から向き合おうと取り組まれた。「今できる支援は何か。モノやカネを送るだけでなく、こども新聞をしっかりと読んで、メッセージを送ることも立派な支援。これなら、ずっと続けられるのではないか」という私たちの問いかけをもとに、授業は、1週目、石巻市で撮った公園ががれきで埋め尽くされている光景などを編集した画像や写真を見せ、現状を説明し、生徒は引き続き「こども新聞」を読んだ。2週目、「こども新聞」を読んでわかったことや、共感したことを書き出し、300字のメッセージをまとめた。メッセージには、生徒たちの新鮮な驚きや被災地への思いが綴られていた。「人通りの多い表通りは復興していても、裏通りはがれきが残ったままというような状況を初めて知りました」「正直、私は被災地の出来事が自分からかけ離れたことだと思っていました。ですが、今はとても身近に感じます。応援します。被災地の復興。そして、元に戻った石巻をこの新聞で見たいです」また、こども新聞の記者が被災地の人たちを取材した記事に「みなさんがどれくらい復興に向かって強い気持ちを持っているか分かりました」と記した生徒もいた。この取り組みは、北海道新聞6.4付教育欄で、大きく取り上げられた。普段は、すらすらと文章を書く生徒が、「相手がどう受け止めるのか。頑張れと書いて良いのか」と悩んで、書いていたのが印象的だった。生徒たちは、被災地の現状についてイメージをふくらませ、しっかり共感していた。134人分のメッセージは、5月下旬に、石巻日日新聞社に郵送された。

#### 5. 研究の成果

これらの教材や授業の取り組みによって、生徒は、被災地の現実を知り、共感できた。中学生徒会を中心に、被災地の人たちから学び、被災地の人々との交流を通じて、被災地の人たちを応援していきたいという気持ちが高まり、2012年10月、生徒会顧問1名生徒2名が、相川小学校で開催された「三校合同同学芸会」に招待され、行事にも参加し、交流した。さらに、「石巻こども新聞」の教材化によって、交流が始まった石巻日日新聞を訪問した。現在、中学生徒会では、「3.11の鎮魂」「相川小学校への返礼のメッセージ」「復興支援への参加」をめあてに、「アイスクャンドル」づくりに取り組み、全校生徒に、共感の輪を広げている。

また、立命館の一員としてのアイデンティティを高めることにもつながった。「平和と民主主義」を教学理念とする立命館らしい企画を実施することで、ばらばらになりがちな、現代の日本社会をつなぐ役割の一端を立命館慶祥中学校の生徒たちが担うこともできると、確信した。